「JISA 版 NTC プロジェクト」第４期活動結果報告

JISA 人材委員会

人材委員会では、令和４年度より「JISA 版 NTC プロジェクト」を開講してきた。本プロジェクトは、トップクラスの IT エンジニアが互いに切磋琢磨しながら、5 ヶ月程度の期間設定の上、社会課題の実践的解決プロジェクトの遂行を通じて、人材力を高度化するトレーニングプログラムである。

第４期プロジェクトにおいては「課題探索と価値創造スキルの向上」、「多様な協働体験」「現場主義と実践的手法の学習」について特に育成するポイントとし活動してきた。6 月にビジネススキル研修を行った上で、7 月より群馬県をフィールドに、毎週のフォローアップ研修を受けながら課題探索・解決プログラムに取り組んだ。なお、本年度のプログラムは以下である。

【本年度プログラム】

■ 課題探索・解決プログラムについて

課題探索・解決プログラムは、「多文化共生」を課題領域として設定した上で、群馬県における課題を探索し、その解決案について事業計画としてとりまとめた。

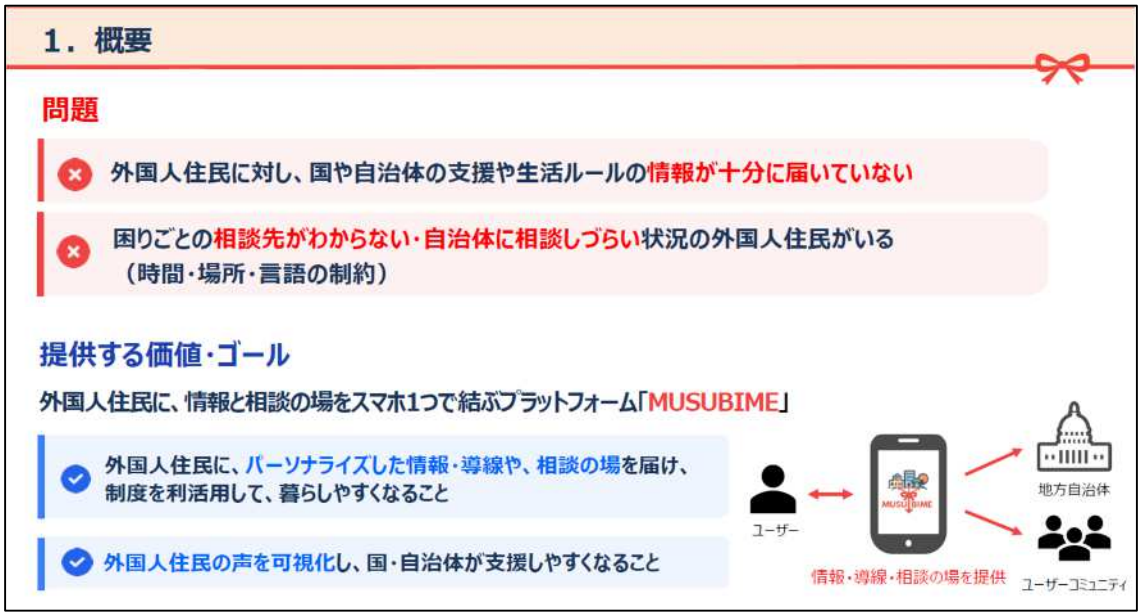
具体的には、設定された課題領域の中でテーマを設定し、群馬県庁 32 階の官民共創スペース「Netsugen（ネツゲン）」において、県職員などからテーマ毎の現状を聞き取り、課題を深堀しながら、解決すべき内容の整理から始めた。その後、ビジネススキル研修で学んだエスノグラフィ手法などを活用しながら現地のヒアリングを繰り返した上で提案に取りまとめた。

10 月 9 日に、検討してきた内容について報告会が群馬県庁で開催された。各チームの発表内容は以下の通り。

・「食」から始める多文化共生～「もぐろーばる」の提案～
・外国人住民⇔地域を双方向に結ぶ情報プラットフォーム
・多文化共生を阻む“見えないコスト”とは？　～その負担、必要？～
【当日の発表動画】　https://youtu.be/RDH94GaO-H4

群馬県県庁関係者からの選定と、JISA 人材委員会において、課題の探索、課題解決のアプローチ、プレゼンテーション力総合評価の 3 項目で評価をし、優れた取り組みとして優秀賞を以下チームに授与した。

「外国人住民⇔地域を双方向に結ぶ情報プラットフォーム」
株式会社ビッツ　紺野　卓也
株式会社 TOKAI コミュニケーションズ　鈴木　雄稀
株式会社中電シーティーアイ　西山　裕基



なお、外国人労働者の構造的課題の本質を粘り強く探究した「多文化共生を阻む“見えないコスト”とは？～その負担、必要？～」（情報技術開発株式会社　片野 知俊　JFE システムズ株式会社　草地 雄佑　株式会社リンクレア　小宮 秀平）を人材委員長賞として称えた。

■ 各チームの論評について

各チームの課題探索・解決プログラムの取り組みについて、群馬県、人材委員会委員からの評価をふまえ、松田人材委員長より以下の通り論評があった。

【A チーム「多文化共生を阻む“見えないコスト”とは？～その負担、必要？～」（人材委員長賞）】

（情報技術開発株式会社 片野知俊、JFE システムズ株式会社　草地雄佑、株式会社リンクレア　小宮秀平）

A チームの提案は、表面的な課題解決にとどまらず、社会構造の深層に潜む「本質的な機会」を捉えた点で、高く評価できる。

A チームは「ベトナム人技能実習生の失踪」という社会問題に対し、その背後にある「経済的な構造欠陥」にメスを入れた。 彼らは、失踪の原因を個人の資質に帰結させるのではなく、「来日前の多額の借金（平均約 67 万円）」と「失踪率」の相関関係をデータに基づき明らかにし、不透明な仲介者への支払いが借金の主要因となっている構造（見えないコスト）を可視化した。

審査員からは「問題のターゲットが大きすぎる」という指摘もあったが、裏を返せば、既存のシステムが抱える矛盾がいかに根深く、解決した際のインパクトの大きさを示している。ISO56002 では、イノベーション・マネジメントの出発点として「機会の特定」が位置づけられているが、A チームの取り組みは、このプロセスを丹念に実践した事例である。

A チームのプロジェクトは、確かに一朝一夕で実現可能な規模ではないかもしれない。しかし、複雑な社会課題の本質（見えないコスト）を直視し、既存の枠組みを超えた解決策を模索したその姿勢は、NTC プロジェクトが目指すものの一つであり、人材委員長賞として賞揚する。

【B チーム「食」から始める多文化共生～「もぐろーばる」の提案～】

（株式会社両毛システムズ　相馬太、株式会社オーイーシー　三浦蓮、株式会社 DTS　松田幸誠）

B チームの提案は、群馬県民が抱える多文化共生への「無関心」という課題に対し、誰もが親しみやすい「食」を切り口として解決を図った意欲作である。審査員からは、以下の着眼点と実現可能性が高く評価された。

・「食」という心理的ハードルの低さ
　「イベントへの参加はハードルが高いが、食事なら行く」という心理を巧みに突き、無関心層を振り向かせるフックとして機能する。
・子育て世代への戦略的なターゲティング
　30 代～40 代のファミリー層にターゲットを絞り、子供たちが自然な形で多文化に触れる機会を創出している点が良い。
・既存インフラ（地域通貨）の活用による実現性
　決済システムをゼロから構築せず、地域通貨と連携することで、開発コストを抑制しつつ、地域経済活性化のメリットも提供できる。
・偶発的な出会いの創出
　「もぐパス」により、ユーザーをランダムに店舗へ誘導し、偶発的な異文化接触の機会を創出している。

一方で、効果の深さと運用面について以下の懸念が示された。
・「食べるだけ」で終わる懸念（最大の課題）
　単に食事をするだけでは、相互理解や深い交流には至らない。現地の言葉で『ありがとう』を伝えるアイデアは、それ以上の対話を生むかが不明。
・店舗側の運用負担
　店員がアプリを確認してスタンプを付与するなどのオペレーションは、飲食店にとって負担となる。
・地域通貨の普及率への依存
　地域通貨が普及していないエリアや層に対してはサービスが届かない。

B チームの提案は、「多文化共生の入り口」としてのデザインは非常に優れているが、「入り口（食事）」から「対話・理解」へ踏み込ませるための具体的な仕組みが欲しかった。

【C チーム　「外国人住民⇔地域を双方向に結ぶ情報プラットフォーム」（優秀賞）】
（株式会社ビッツ 紺野卓也、株式会社 TOKAI コミュニケーションズ 鈴木雄稀、株式会社中電シーティーアイ　西山裕基）

C チームは、生成 AI による次世代デジタル技術と人間系支援を融合させ、課題を包括的に解決する点において高く評価された。評価の理由は、主に以下の三点である。

第一に、生成 AI 活用による情報アクセスの抜本的改善である。 従来の行政情報提供には、外国人住民に「知られていない」、あるいは「能動的に探さなければたどり着けない」という大きな壁があった。これに対し「MUSUBIME」は、ユーザー属性に合わせたプッシュ通知により、受動的な情報到達を実現。「知らなくても、探せなくても制度を使える」状態を創出し、情報伝達の課題を根本から解決する。 また、AI チャットボットによる 24 時間多言語対応は、平日日中に限定されていた行政相談の「時間・場所・言語の制約」を克服するものである。個に深く寄り添い、いつでもアクセス可能なこの仕組みは、NRI が提唱する「デプスエコノミー」※にも通じる、顧客サポートの進化形と言える。

第二に、生成 AI とコミュニティによる人間系支援のハイブリッドモデルの構築である。 AI では解決が難しい相談や、人間的な共感を要する場面においては、「ユーザーコミュニティ」での相互扶助や行政への「相談取次ぎ」を通じ、シームレスに人による支援へとエスカレーションされる。この仕組みは外国人住民の孤立を防ぎ、安心して日本で暮らせる環境を担保する。

第三に、自治体側へのメリットである。 プラットフォームを通じて収集された外国人住民の「声」や「相談傾向」を可視化し、ナレッジデータベースとして蓄積できる点は大きい。これらのデータは、根拠に基づいた多文化共生施策の検討を可能にし、行政側の相談対応の効率化と政策立案能力の向上に寄与する。

「MUSUBIME」は、AI 技術による効率化と、人が担うべき「安心感・共生」の価値を両立させた提案であり、多文化共生社会の実現に向けた次世代型情報プラットフォームモデルとして、評価に値する。よって優秀賞にて賞揚する。

※https://www.nri.com/jp/knowledge/report/20250512_1.html

■ 本活動を振り返って　受講生より

【草地　雄佑　JFE システムズ株式会社】

我々のチームでは、群馬県に住むベトナム人技能実習生に焦点を当て、多文化共生を阻む「見えないコスト」について課題の探索と解決策の提案を行いました。

様々な組織の方々へのヒアリングを通じて、データだけでは見えてこない現場のリアルな声に触れることができました。プロジェクトを通じて、「誰の、何を、どう解決するか」という問いを繰り返し考えることで、課題の本質に迫る力が養われたと感じています。

特に印象的だったのは、「多様性の力」を実感できたことです。異なる企業文化や専門性を持つメンバーとの協働は、時に認識のズレや意見の衝突を生みましたが、それこそが新たな価値の創出につながる原動力でした。文化的背景が異なる人々のニーズを理解し、共に課題を解決していくことは、今後の業務や社会活動においても重要なスキルであり、積極的に活かしていきたいと考えています。

【相馬　太　　両毛システムズ】

本研修で学んだことは、聴く力と思考する力が仕事をするうえで求められるスキルだということです。

私は受託開発が多く、自ら課題を見つけ提案することは経験がありませんでした。受託開発は請け負ったものを作り上げることが求められます。それがなぜ必要なのか深く考えていなかったことに気づきました。

なぜ必要なのか聴く・思考することで、本来やるべきことが見えてきたのかもしれないと思いました。

今後取り組みたいことは、聴く・思考する力を身に着けていくスタイルを確立することです。聴く・思考する手段には、さまざまな手法やツールがあります。本研修で、まだまだ知らないことがたくさんあると痛感しました。常に学びと実践を行い、自分の目指す姿を描いて精進していきたいと思います。

【松田　幸誠　株式会社 DTS】

今回の研修では、とりわけ「課題意識」と「価値創造」を学べたと感じています。生成 AI をはじめ技術が急速に進展するなかで、IT 人材の価値を高めるのは受け身の姿勢ではなく、データと事実に基づき新たな価値を生み出す創造性であると強く実感しました。

価値創造の基盤として、座学では ISO 56002 の考え方をご教示いただきました。一方で、この考えについてフィールドワーク等を通じて実践すると、そ

の難しさを痛感しました。課題探査のプロセスそのものに加え、得られたデータに意味を与えて活用へつなげる段で、課題設定よりも手段に思考が流れてしまう場面が幾度かありました。また、得たデータについても「真に課題として向き合うべき情報」「他情報と結び付けることで意味が生まれる情報」「意味はあっても実現可能性の観点で解決が難しい情報」など、多様な情報を見極める必要性を強く感じました。こうした思考を巡らせ、イノベーション創出に向けて行動する経験を得られたこと、また他社の受講生やメンターの皆様から多角的な視点に触れられたことは大変有意義でした。

個人としては、提案内容を納得のいく水準まで詰め切れず、悔しさと課題を痛感しています。今回の学びを踏まえ、より社会に求められる価値の提供へ一層邁進してまいります。

本研修の実施にあたり格別のご指導・ご助言を賜りました皆様、ならびに群馬県にて多大なるご支援を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

【小宮　秀平　株式会社リンクレア】

本プロジェクトを始める前は、新規事業創出の手法について具体的なイメージが湧かず、漠然としたものでした。しかし、5カ月間にわたりビジネススキル研修の受講や、課題探索・解決プログラムでメンバーやメンターの方々と日々やり取りを重ねる中で、事業計画策定に向けて主体的に行動できるようになりました。

その結果、具体化と抽象化を繰り返しながら、以下の観点について深く考えられるようになりました。

- 物事のペインは何か
- そのペインに対する解決方法は最も効果的か
- 解決方法はステークホルダーにメリットを与えるか
- ビジネスとして成り立つか

これらの思考は、日々お客様と向き合う際にも役立ちます。与えられた要件に対して単にシステムを作るだけでなく、お客様が抱える（あるいは気づいていない）ペインに対して、最も効果的な解決方法を提案できると考えています。

そして、何よりも本プロジェクトを修了した今、新規事業創出はもはや漠然としたものではなく、具体的にイメージできるものになりました。今後はぜひ、どこかで挑戦していきたいと思います。

【三浦　蓮　　株式会社オーイーシー】

「当事者意識を持って物事に取り組むこと」、この姿勢がＩＴトップアスリートにおいていかに重要であるかを、本研修を通じて強く実感いたしました。

我々のチームは「外国料理店への来店を通じて『多文化共生』に関心を持ってもらう」というコンセプトのもと、課題探索および解決ソリューションの提案を行いました。その過程で得られた学びは、大きく３点あると考えています。

まず１つ目は、「解くべき課題を特定すること」です。自分たちが取り組もうとしている課題が、本当に自分たちが解くべき課題なのか、そしてそれが根本的な原因の解決につながっているのかを考え、何度もイテレーションを重ねることの大切さを学びました。

次に２つ目は、「ファクトな情報に基づく裏付け」です。自分たちが創造したコンセプトの検証に際しては、ステークホルダーへのヒアリングや、オープンデータなどから得る“ファクト”な情報に基づいて検証することで、より多くの納得を得やすいと感じました。

最後に３つ目は、「思考することの重要性」です。先に述べた２点にも共通しますが、収集・分析した情報を表面的に受け取るのではなく、時間をかけて深く思考することで本質的な解決策が見えてくることを学びました。

これらの学びに共通しているのは、「当事者意識を持って物事に取り組む」ことの必要性です。当事者意識を持つことで、日常の中でのインプットの量が増え、アウトプットの質が高くなることを実感しました。これらを踏まえ、今後ＩＴトップアスリートを目指す上で、自らの取り組みに当事者意識を持ち、積極的に新たな価値を創出できるよう努めてまいります。

【西山　裕基　株式会社中電シーティーアイ】

NTC プロジェクトを通じて、従前の業務スタイルと異なる「自ら課題を探索し、解決策を考え、提案する」という一連のプロセスを経験できたこと自体が、大きな学びとなりました。

課題探索については、当初「良くない状態を改善する」といった漠然としたビジョンしか描けず、迷走を重ねました。しかし、「問題・ペイン・課題・ゴール」を明確に切り分け、事実に基づいて思考を重ね、手段の目的化や机上の空論に陥らないフレームワークを体得できました。

チームビルディングの面では、立場・経験・得意分野の異なるメンバーが集まる中で、アジェンダや方向性を明確に提示し、全員で同じゴールを決めて、同じ方向を向いて歩む経験ができました。

また、AI 技術の進化により、IT 人材の価値の変容に伴う、仕事の取り組み方の変化も実感しました。今後は「手を動かす」ことに多くの時間を費やすよりも、AI を活用しつつ「思考・整理」に時間を割くことの重要性がますます高まると思われます。この変化を、実体験を通して身をもって学びました。

資料作成やプレゼンの面でも、PREP 法などのメソッドをはじめ、「誰を主語に置くのか」「何を伝えたいのか」「聞き手は何を求めているのか」といった視点で構成を考える重要性を学びました。

ここに挙げたのは学びの一部に過ぎませんが、いずれも業務や環境を問わず活かせるものであり、今後は実務の中で活用・応用するとともに、ゆくゆくは周囲へと共有し、組織全体の力へと広げていきたいです。

最後に、この 4 か月間で、群馬県庁やヒアリング先の各位をはじめ、たくさんの方々から多大なご協力をいただきました。初めて出会う地域・企業・立場の方々とビジョンを共有し、「仲間」として共創できた得難い経験そのものが、私にとって最大の学びであり宝物となりました。この場をお借りして、ご協力いただいたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

【鈴木　雄稀　株式会社 TOKAI コミュニケーションズ】

約 5 か月の活動を振り返り、本研修でしか経験できない「課題の探索からコンセプトの創造・検証」に至るまで、さまざまなプロセスを経て、トップ IT エンジニアへの一歩を踏み出せた非常に価値のある経験だったと実感しています。

理由は大きく 2 つあります。1 つ目は、課題を正しく導き出す力が定着したことです。エスノグラフィや数値データを「量的・質的」両面から分析・思考する中で、本質的な課題を明確にする難しさを痛感しました。活動の途中でも、課題設定の不十分さから再検討に戻る場面があり、悔しい思いもしました。しかし、チームメンバーとの意見共有や各メンターからのご支援を通じて、多角的に物事を捉える視点を養うことができ、課題解決において欠かせないスキルであると実感しました。今後は、情報収集の継続とその社内発信を通じて、さらなるスキル向上を目指していきます。

2 つ目は、ヒアリングで得られる情報の重要性を学んだことです。欲しい情報を端的に引き出すことは容易ではなく、想定外の回答が得られることもありました。しかし、目的や進め方次第では、相手の悩みや本音といった、SNS やインターネット上では得られない貴重な情報を得られることや、ヒアリング技術や方法次第で、有意義な時間を創出できることを学びました。今後は、得られた情報をどのように業務へ活用できるかを探求し、自身の強みとなるスキルへと高めていきたいと考えています。

これからのソリューション開発は、生成 AI の進化により、容易に実現できる時代が到来すると示唆されています。その中で、「どんな課題を解決し、価値を提供できるか」をひたむきに考え抜き、イノベーション(変革）をもたらす人材として成長できるよう、引き続き精進してまいります。

【片野　知俊　情報技術開発株式会社】

本研修の大きな特徴は、「課題の探索から事業計画書の作成をゼロから行う」ことであると思います。

私はこれまで、お客様から提示されたRFPをベースとした提案の経験しかなかったため、全ての取り組みが新鮮で沢山の学びがありました。今回は群馬県の「多文化共生」という正解のないテーマに対して、机上調査やヒアリングを基に課題設定を行い、解決案の検討を行う過程を繰り返し行いました。その過程の中では、「問題を論理的に考えられているか」、「目的と手段が合っているか」、「当事者も気づいていない問題に気づけるか」という観点が求められ、とにかく思考する時間を多くとりました。とくに課題設定が曖昧な状態だと、「ソリューション（How）」が先行してしまい、目指すゴール（軸）がブレてしまうため、今までの考え方の癖を直すことも難しかったです。そのため、「誰（Who）の何（What）を解決するのか」、「なぜ自分がやるのか、その理由は何か」ということから考え、相手を納得させるための言語化スキル（ファクトを基に定量的に自分の言葉で語る）も本研修において非常に重要な要素であると感じました。

上記で記載したことは、本研修で学んだ事のごく一部に過ぎませんが、本研修で学んだことを社内に活かし、会社にイノベーションを起こす人財になりたいです。

様々な壁にぶつかることもあるとは思いますが、そのときには本研修を思い出し、目指すゴールに向かって切磋琢磨できればと考えております。最後に、本研修に関わってくださった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

【紺野　卓也　株式会社ビッツ】

まずは本プロジェクトに関わってくださった全ての方々に、心より感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

本研修を通して、特に大きな学びとなったのは、「人とつながる」こと、そして「相手に思いを伝える」ことの重要性です。 今回の課題領域が「多文化共生」ということで、国際的かつ複雑な社会課題であったと改めて感じています。 その大きな課題に対し、行政・NPO・企業・外国人（地域住民）の方々に多大なご協力をいただき、最終的にそれらを盛り込んだビジネスモデルを検討することができました。 まさに「コレクティブ・インパクト」、組織の垣根を越えたつながりがあってこそ、形にできたのだと確信しています。

また、そのビジネスモデルの価値を伝えるために、講義で学んだPREP法やICCカタパルトのピッチ動画を参考に、練習を重ねました。 最終発表では生成AIを用いたモックアップも交えながら、ご清聴いただいた方々に私たちの思いを伝えることができたと感じています。

本経験を糧に、より良い社会を目指して今後もさまざまなことにチャレンジしていきたいと思います。

2025年10月30日修了式